# エリートと呼ばれた漢たち～中学校編～

漢景明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エリートと呼ばれた漢たち～中学校編～

【Ｎコード】
Ｎ２６７５Ｑ

【作者名】
漢景明

【あらすじ】
啓明学園。
日本帝国大学進学数日本一を誇るこのエリート校に集った５人の漢たち。
男でも女でもなく漢。
そう呼ぶしかない漢たちの、単なる友情とは一線を画した漢の交わりと生き様を、主人公の目を通して綴った長編小説。

## その漢、皇帝につき

全てはこの一言から始まった。

「オウ、お前強そうだな。相撲とろうぜ」

名を名乗るでも尋ねるでもなく、なんら前置きもない。

これが正真正銘この男が私にかけた最初の言葉だった。

この、どう拡大解釈しても常識的とは言い難い挨拶を繰り出してきた男こそ、この物語の主要人物の一人であり私を漢の世界に導いた張本人でもある。

この男との出会い無くして、今から語られる長い物語が生まれることもまたなかっただろう。

そういう意味では主要人物の中でも最も重要な漢と言ってもいいかもしれない。

この男の名は皇帝。

もちろん本名ではない。ニックネームである。その由来についてはいずれ明らかになる。

皇帝は同じ中学一年生の中でも比較的小柄な部類に属しており体型も筋骨隆々には程遠くどちらかと言えば細身と言っても差し支えない体格であった。

少なくともその体躯を以って強さ、特に相撲の強さを相手に納得させるにはいささか説得力に欠けると言ってよいだろう。

だがそれは決して皇帝が弱そうに見えるということを意味しない。

これといった特徴に欠ける肉体に対して顔貌、特にその両の眼の光の鋭さは一見して強烈なインパクトを他人に与えるに十分なほど際立っていた。

それは人よりもむしろ動物的な、しかも野獣のそれに近い殺気を伴

った輝きを放っており、もしニューヨークのスラム街でこういう目をした若者を見たら多くの人間はヤク中を最初にイメージし可能な限り関わりを持たないようにするだろう。
そしてその眼光が発する尋常ではない闘気は有無を言わさぬ迫力を備えていた。
その圧力に気圧された形で私は皇帝からの相撲の申し出を受けてしまっていた。
とは言えこの時私が何らかの了承したことを示すような返事を皇帝に対してした記憶はない。
実のところ返事をする間も必要もなかった。

当時から、もちろんその時の私はそんなことを知る由もなかったが、皇帝は相手の返事を待ってから行動を起こすようなタイプではなかった。
己がやりたいと欲しやると決めたことはやる。
そこに相手の同意を必要とはしなかった。
皇帝は相撲の申し出に対して私が何らかの返答をする前に既に砂場の中央へと向かっていた。
私もまた何も言わず少し遅れて皇帝と向かい合う位置についた。
その行動が皇帝に対する私の返答となった。
もっともこれが相撲ではなく例えば殴りあいの喧嘩の挑戦状だったとしたら、いかに皇帝の闘気に酔わされようとも私は声を大にしてその申し出を断っただろう。

控えめに言っても私は相撲に関しては少しばかり自信があった。
三歳年上の兄と小学校の低学年から日常的に相撲をとっていた私は同学年の中では恵まれた体格をしていたこともあってか同級生に相撲で負けることはまずなかった。
兄にしてからが校内最強の素人力士であり、その兄から日々さんざん鍛えられていた私はただ単に体格で押すだけではなく相撲におけ

る基本的な力学、組み合った態勢によってどこを押せばあるいは引けば相手のバランスを崩せるかといったようなものをいつしか自然と身に付けていた。
したがって当時中学一年の私は同学年の素人であれば自分より体格の上回る者を相手にしても相撲力学を応用して敵を凌駕できるとさえ自負していた。

そんな私にとって今目の前に現れた挑戦者は明らかに身長、体格共に私より劣っており、よもや相撲で負けるとは思えない相手としか映らなかった。
もちろん自ら体格の上回る相手に挑んでいくくらいだからそれなりに相撲の覚えはあるのだろうがそれでも私に挑むのはあまりにも無謀と思われた。
もし私をただ体がでかいだけの男とみなし「小よく大を制す」の精神で挑んできたのだとしたらあまりにも相手が悪かったと言うしかない。

ならば一つその無謀な挑戦を後悔させてやるのも一興か。
そんな意地の悪い快感が私の中で湧き上がっていたことも否定できない。
実際にはこの間僅かにコンマ数秒。
皇帝の風変わりな挨拶から二人が向かい合うまでに要した時間はそんな程度であった。
相撲という競技は互いの間合いさえ合えば開始の合図をする役割の行司などいなくても勝負は成立する。
互いに蹲踞の姿勢から手を下ろしにらみ合う。
両者の気が練れたタイミングが一致すれば掛け声などなくとも勝負は自然と始まるのである。
この時の皇帝と私の勝負はまさにそういうタイミングで始まった。
それも両者手を下ろしたとほとんど同時くらいにそのタイミングは

訪れた。

そして始まった勝負はあっけなく私の完勝に終わった。
それは好勝負と呼べるほどのものではなく私にとってみればごく当たり前に力量の差を見せ付けただけの相撲だった。
彼我のいかんともし難い力の差をはっきりと認識させられてこの男もさすがに私に挑んだ無謀を後悔して凹んでいるのでは。
私は快感と同時に少しばかり同情の念も抱き始めていた。

しかしそれは私の完全なる思い違いであった。
相撲に負けて土を舐めさせられ立ち上がった皇帝の目は落ち込んで後悔の影が差しているどころか戦いの前に見せた闘気をいささかも失ってはいなかった。
いや、むしろその輝きには新たに喜びという色が加わったかにさえ見えた。
私に近づいてきた皇帝が次に発した言葉を私は終生忘れることはないだろう。

「いやあ、やっぱりお前強いな。でも俺も強かっただろ」
そこには照れも強がりも後悔も打ちひしがれた様子も感じられなかった。
その敗者としてはありえないあまりにも堂々とした物言いは私の中で構築されてきた価値観を完璧に打ち砕いた。
そこには己の強さを戦った私が認めるのは当然という確固たる自信が漲っていた。
その自信は私の心に激しい動揺を与えるに十分であった。

通常勝負に敗れた者の強さを評価する権利は無責任な解説者を除けば勝者にのみ与えられるものだろう。
勝者が強いことは改めて誰が認めなくとも結果がそれを支持してく

れる。
それに対して敗者の強弱は勝者の言葉一つでどうにでも転び得る危ういものである。
「勝ちはしたけど手ごわかった」か「全然口ほどにもなかった」とでは同じ敗者でもその評価は雲泥の差でありいかに屈辱的な評価であっても敗者はそれを甘んじて受け入れる他ない。
それがプロであろうと素人相撲であろうと勝負というものの持つ普遍の掟である。
それが私のそれまでの常識であった。
あっけなく皇帝を下した私がやや同情の念を抱いたのも一つにはそれが理由であった。

恐らくは相撲に自信を持って挑んできたはずのこの男のプライドは打ち砕かれ、その強さは今や私の掌の上にあり私の言葉一つで地に落ちる可能性さえあった。
もし私が誰かに皇帝の相撲の強さを聞かれて
「ああ、あいつね。自分から挑んできたからちっとは手ごたえがあるのかと思ったけど弱すぎて話しにならなかったよ。」
とでも言おうものなら皇帝がこの学校で相撲の強さを自慢することなど二度と出来まい。
いわば私に命運を握られた形となった哀れな境遇が同情を誘ったわけである。

しかし皇帝にはどうやらそういう勝負の常識も掟も無縁だったらしい。
皇帝の命運を握っていたはずの私はその敗者から自身の強さを強制的に認めさせられる勝者という不思議な立場に立たされた。
もはや私には相撲に勝った満足感など微塵もなかった。
言い訳のしようもない完敗を喫したにもかかわらずなお自身の強さを負けた相手に誇るこの男。

初対面の挨拶といいそれまで私の属していた文化圏には存在しないタイプの人種だった。
いわば異文化交流のようなカルチャーショックを受けた私はただ皇帝の言うがままにその強さを認める他なかった。

後に残ったのはただこの男に圧倒されたという敗北感のみ。
私は確かに相撲には勝ったが人間としての勝負には完敗した。
よく「相撲に勝って勝負に負けた」という言い方をするがこの時の私はまさしく「相撲に勝って漢に負けた」のだった。
そう、この男皇帝こそ私が人生で初めて出会った漢という人種であった。
男でも女でもなく漢。
以後私はこの学校で皇帝をはじめとして生涯の強敵(とも)となる四人の漢たちと出会うことになる。
日本帝国大学進学数日本一のこの啓明学園で。

## 登場人物紹介

皇帝：秦の始皇帝の末裔を自称するがその家系図は子供の走り書き程度のお粗末さであり、周囲から一笑に付されている。しかし始皇帝の生まれ変わりである可能性については、多くの者を納得させるだけの天性の傍若無人さを身に着けている。

魔王：そのユーモラスな巨躯と授業中にくしゃみが2クラス先まで聞こえたという逸話からハクション大魔王を思い起こさせる。あらゆることの要点を的確に把握する能力は天才的。塾に通わずに啓明に合格したというその天賦の才はエリート集団の中にあっても抜きん出たものがあるが、努力と向上心と世間体とは無縁なため、入学後の成績は常に最下位候補。

天災：明らかに一般人とはかけ離れた思考過程を有しているが、その能力がプラスとして評価されることはほとんどない。登場人物中最も変わったキャラクターであり、いつも一緒にいながら誰一人その本質を理解していない（しようとしていない？）。

軍人：物心つく前から船乗りの父より将たる心得を叩き込まれて育った生まれながらの軍人。あらゆる事において負けを認めることを許さない高すぎる誇りを身に纏う。低身長、よく日焼けした鋼の肉体、壁に当たって跳ね返る際の驚異的な加速から「黒い弾丸」「スーパーボール」などと呼ばれることもある。

神童：浅草生まれのジャニーズ系男前。そのルックスと知能の高さから地元ではかつて神童と言われていたとかいないとか。自称ゆえその真偽は定かではない。

私：この物語の主人公。皇帝をはじめとした漢たちとの交わりから漢性に目覚めていく。腕相撲の強さから一部では「神」と称されることも。

開成教師

楠木：英語担当。ミック・ジャガーに傾倒するプロの雀士。

ヨウゾウ：数学担当。

後藤：柔道部顧問。

角山：化学担当。

宇治原：英語担当。

その他生徒

虎田：同級生。柔道部員。

白田：同級生。中１黄組２番騎心棒。

山川：同級生。柔道部員。

斎藤：同級生。

大林：同級生。柔道部員。

梅澤：同級生。柔道部員。

野村：同級生。柔道部員。

岩村：４学年上級生。柔道部員。中１時の部長。

木田：４学年上級生。柔道部員。中１時の担当。

山室：４学年上級生。柔道部員。

村井：同級生。野球部。

川井：１学年上級生。柔道部員。

坂入：１学年上級生。柔道部員。

小谷：２学年上級生。柔道部員。

井上：２学年上級生。柔道部員。

加藤：５学年上級生。柔道部員。

尾崎：３学年上。柔道部員。

小川：３学年上。柔道部員。

## 第1話　啓明にとって運動会とは？

「啓明学園と言えば？」
という質問をすれば一般の人はまず大抵「日本帝国大学」「偏差値」「進学校」「御三家」といった言葉を最初に思い浮かべるだろう。
一方同じ質問を啓明卒業生に行ったとすれば上記のような学力、知的能力に関する用語が上位に出てくることはまずないと思われる。
代わりに過半数以上の支持を得て最も多くの者から出てくる言葉が「運動会」だろう。

これにはおおむね二つの理由が考えられる。
一つは学力に関する評価は既にアピールするまでもなく定まっていて改めてそのことに言及するのは些か芸がないと感じられるという過剰な自意識。
もう一つは学校生活の中で最大多数の生徒が最も時間を費やしたイベントという客観的な事実。
いずれにしても好むと好まざるとに関わらず開成において「運動会」の占めるウェイトは他のいかなるイベント、文化祭や修学旅行など他の学校では最も印象に残る行事となりうるもの、とは比較にならないほど大きい。

啓明運動会ではその運営の全ては生徒の手に委ねられている。
中高一貫教育であるこの学校では最上級生となる高校3年生がその全権を握ることになる。
しかし彼らが準備を開始するのは実際には約一年前、高校2年の春からである。
つまり運動会が開催される5月の上旬に前年度の最上級生からその全権を譲り受けるわけだ。
そして一年後の運動会に向けて運営に携わる生徒たちは大げさでは

なく生活の大部分をその準備に捧げることになる。

たかが運動会に何故それほど準備時間が必要なのかといぶかる向きもあるかもしれない。

確かにただ決められた競技をするだけなら一年間という期間は不要だろう。

啓明運動会には実はある意味競技そのもの以上に重要とも言える付属品がある。

それが「応援」である。

なあんだ応援か。

そんなものはどこの学校の運動会でも、それこそ小学校でもやっているじゃないか。

そう言う人も多いだろう。

しかし啓明運動会における「応援」は恐らくは普通に想像されるような運動会の応援ではない。

恐らくというのは他の中学や高校の運動会をさほど知っているわけではないからだが決して私一人だけの思い込みでない証拠の一つとしてマスコミの取材を挙げてもいいだろう。

当時啓明の運動会にはその練習風景や当日の様子などを毎年幾つかのマスコミ機関が取材をするために訪れていた。

それは偏差値が高く勉強ばかりしているという進学校の一般的なイメージと総勢２１００人が一つのイベントに全精力を注ぎ勝っては歓喜の涙を流し負けては悔し涙で泣き崩れる姿とのギャップに記事としての価値があると判断してのことだろう。

ということは少なくとも一般的な進学校ではこうした熱狂的と表現しても決してオーバーではない運動会は珍しいものと考えてもさほど大きく外れてはいないのではないか。

この啓明運動会の他と違う最大の特徴が「応援」にあると言っても

過言ではない。
高校２年の春に全権を任された生徒がまず最初にしなければいけないこと。
それは来年の運動会で自分たちの組を鼓舞し象徴する歌を作り上げることだった。
毎年歌い継がれている伝統的な歌やその年の流行歌を少しアレンジするというようなものではない。
全くの無から自分たちだけの力で歌を作るのである。
作詞、作曲を含めて全てオリジナルのものを。

啓明が音楽のエリートが集まる専門学校であればこれはさほど無理な課題ではないかもしれない。
しかし現実には啓明は単に学力が高い人間が集まっているだけでありしかもその学力を判断する入学試験に音楽という科目は当然ながら含まれていない。
では入学後に音楽力を高めるような授業が施されているかと言えばそれも全くない。
それどころか音楽を含めたいわゆる芸術科目にこの学校が置いている比重の低さについてはいずれ改めて触れることになるだろうが、法律で定められた義務がなければその名をカリキュラムから抹消することになんら躊躇いを感じることはないだろうと想像させるに十分なものであった。

そんな啓明においてごく普通の、音楽的素養に関しては並以下と言っても良いレベルの、高校生がオリジナルの歌を作詞、作曲するというのはそう簡単なことではない。
しかも話はこれで終わりではない。
ただ歌を作って歌うだけでは応援とは呼べない。
出来上がったオリジナルソングに今度は応援団が行うための振り付けをしなくてはならない。

これまた当然オリジナルの振り付けであり生徒が自ら考案するのである。

作詞、作曲、振り付け。
これらが全て完成して初めて応援団と呼ばれる１０人ほどの集団がその歌と振りを覚えるという段階に進めるのである。
このような様々な準備を一年間かけて行い迎える高校３年の春。
彼ら高校３年生には古くから綿々と続けられてきた、取りようによっては悪趣味とも言える、最上級生にのみ許されたちょっとしたお楽しみの儀式があった。
それが新中学１年生との「顔合わせ」である。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2675q/

---

エリートと呼ばれた漢たち～中学校編～

2011年1月26日10時53分発行